

教育研究業績

2023年 5月 1日

氏名 瀬沼 文彰

研究分野	学位
社会学、コミュニケーション学	コミュニケーション学修士

研究内容のキーワード

コミュニケーション、若者、若者文化、メディア、笑い、ユーモア

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 1) 演習形式のアクティブラーニングの実施 2) レポートのフィードバック	2008年 ～現在 2009年4月 ～現在	西武文理大学「対人関係基礎演習」「対人関係応用演習」にて、実習形式・及び学生の参加型の講義の実践 桜美林大学「口語表現Ⅰ」でのスピーチ実習の講義及び、レポートの個別指導とフィードバック
2 作成した教科書、教材 1) コミュニケーション・スタディーズ 2) 文科系学生のレポート・卒業術	2010年4月1日 2013年4月1日	渡辺潤 監修『コミュニケーション・スタディーズ』世界思想社（共著）担当：「笑いと泣き」（102～108頁） コミュニケーション論のテキスト、学生がコミュニケーションをゼロから学ぶにあたって、興味を持ち、日常生活の当たり前の行動に関し、なぜだろうと疑問を持ってもらえることを目的として制作した。（以下著書の欄に詳細） 渡辺潤、宮入恭平編著『文化系学生のレポート・卒業術』（共著）担当：「若者」（69～75頁） 初年次教育及び、大学で何を学ぶのか、大学での勉強の仕方や資料の集め方などを共著者たちと議論し一緒にまとめた。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		特になし
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) オープンカレッジ講師 2) 生涯学習センター講師	2006年9月 ～2019年3月 2011年4月 ～2019年3月	社会教育講座 桜美林大学オープンカレッジ非常勤講師 担当科目：「笑い学入門」全5回 社会教育講座 東京家政大学 生涯学習センター 非常勤講師 担当科目：「笑いのコミュニケーション入門」全3回
5 その他		特になし

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		特になし
2 特許等		特になし
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 吉本興業（株）にてタレント活動 2) FM多摩にて、ラジオパーソナリティ	1999年4月 ～2002年6月 2008年7月 ～2009年4月	吉本興業（株）にてタレント活動 舞台：ルミネTHE よしもと、小樽よしもとなどに定期的に出演 他、東京都内の舞台に出演 テレビ TBS『ガチンコ』『ガチンコ漫才道』というコーナーに出演 他、ラジオなどに出演（至2002年6月） FM多摩「考えるコミュニケーション講座」（全39回）にてパーソナリティ コミュニケーションと関連する問題をまじめに考えてみることを狙いとした10分程度の番組（至2009年4月）
4 その他 (社会活動講演等)		

三鷹親和塾 三鷹市西社会教育館（依頼あり）	2006年9月14日	「笑って健康になろう」と題し講演
-----------------------	------------	------------------

足立区佐野塾センター（依頼あり）	2007年7月25日	「笑って健康になろう」と題し講演
足利市教育委員会 足利市山前公民館ホール（依頼あり）	2008年6月12日	「笑いの心理学」と題し講演
立川市立中学校PTA連合会 女性センターAIM（依頼あり）	2008年9月6日	「若い世代のコミュニケーションのスタイル」と題し講演
東京都レクリエーション研究大会 オリンピック記念青少年総合センター（依頼あり）	2008年12月7日	「笑いのコミュニケーション」と題し講演
清瀬シニアカレッジ（依頼あり）	2009年10～11月 （全5回）	「笑いコミュニケーション」と題し講演
桜美林大学 口語表現FDスタッフ会議（依頼あり）	2010年9月18日	「若い世代のコミュニケーションの特徴」と題し研修講師
椙山女学園大学 日本笑い学会中部支部 第122回笑例会（第14回中部支部大会）講師（依頼あり）	2012年5月13日	「若者たちの笑いのサバイバル——いまどきの若者たちは何を笑うのか」と題し講演
ソレイユ相模原 イオン橋本店 講師（依頼あり）	2014年10月14日	「もっと笑い、もっと笑わせる」と題し講演
日本プロフィエンス研究会 西宮市民交流センター（依頼あり）	2015年10月4日	「元芸人の考える話を面白くする方法」と題し講演
ソレイユさがみ 相模原市立男女共同参画推進センター（依頼あり）	2016年7月15日	「地域デビューのためのご機嫌な人間関係に役立つ笑いのセンス」と題し講演
サンワビジネススクール主催 アーツカレッジ専門学校 研修講師（依頼あり）	2017年3月2日	若者たちの動向及び、社会人に必要なコミュニケーションスキルに関する研修及び講演
東京武村会 企業研修（研修講師）	2017年11月2日	「心を元気に～笑いコミュニケーション～」と題し研修講師
サンワビジネススクール主催 アーツカレッジ専門学校 研修講師（依頼あり）	2018年3月5日	若者たちの動向及び、社会人に必要なコミュニケーションスキルに関する研修及び講演
横浜ロイヤルパークホテル 明星大学 「自己と社会Ⅱ」 講師（依頼あり）	2018年5月19日	卒業生の立場から卒業後のキャリアについてのゲスト講師
公益財団法人としま未来文化財団主催 南大塚地域文化創造館（依頼あり）	2018年6月14日 ・6月21日	「若者ことば学」と題し講演
日本笑い学会関東支部 研究会 講師（依頼あり）	2018年12月15日	芸人と元芸人による日本のお笑い・ユーモアについて（対談形式）
サンワビジネススクール主催 アーツカレッジ専門学校 研修講師（依頼あり）	2019年3月1日	若者たちの動向及び、社会人に必要なコミュニケーションスキルに関する研修及び講演
目黒区立第一中学校 PTA（依頼あり）	2019年9月5日	「親も子も“笑い”で乗り切るストレス社会」と題し講演
狭山市役所研修 研修講師	2019年11月15日	「印象アップのキャラづくり研修」と題し講演
公益財団法人としま未来文化財団主催 南大塚地域文化創造館（依頼あり）	2019年12月8日	「若者ことば学Part2—昭和と平成と令和の流行語」と題し講演
寒川町 神奈川県婦人団体活動研究発表大会 講師（依頼あり）	2020年2月19日	「笑い上手で日常生活をもっと楽しくする」と題し講演
サンワビジネススクール主催 アーツカレッジ専門学校 研修講師（依頼あり）	2020年3月3日	若者たちの動向及び、社会人に必要なコミュニケーションスキルに関する研修及び講演
横浜ロイヤルパークホテル 甲府アドバンスクラブ 山梨県立図書館（依頼あり）	2020年9月7日	「笑いで健康！」と題し二部制（コロナ対策）にて講演
豊島区男女平等推進センター エポック10 としま産業振興プラザ（依頼あり）	2021年1月29日 ・2月5日	「新しい生活様式と笑いのコミュニケーション」と題し講演
さやま市民大学 オンライン	2021年11月9日	「笑って健康」と題し講演
（インタビュー）		
朝日新聞 全国版	2008年6月14日	「癒しとしての『おバカ』キャラ」と題し、キャラとタレントについてコメント
朝日新聞 全国版	2011年12月5日	「『すごっ』ツッコミ語全国区 短く便利 会話に角立たず」という記事（文化庁の国語に関する世論調査）の結果についてコメント
朝日新聞 全国版	2013年7月6日	「そっくりさん いじられ開眼」お笑いメディアについてのコメント

朝日新聞 全国版	2019年6月27日	吉本興業の闇営業についてお笑いメディアの研究者としてコメント
朝日新聞 全国版 (そのほか執筆)	2023年2月7日	『論の芽』にて「難しい毒舌の使いか 傷つく人いませんか」にてコメント
日経BizGate (依頼あり)	2019年7月31日	「吉本だけ? 『闇営業』 生む組織の空気」と題し寄稿
現代ビジネス (依頼あり)	2019年12月31日	「天才・松本人志の『限界と今後』日本人の笑いにもたらした功罪」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2020年1月8日	「笑う門にはイノベーション 楽しい職場の作り方」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2020年2月5日	「お手本はよしもと新喜劇 笑いの共創が生む組織活性化」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2020年7月31日	「オンライン会議 笑いをノイズにするな」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2020年8月19日	「オンライン会議、空気を読むな『新しい笑い』共創を」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2020年12月11日	「オンライン会議 キャラを立てて距離を縮めよう」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2020年12月23日	「オンラインで会話盛り上げるMC力と傾聴力」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2021年1月15日	「オンライン会議でキャラを立てる3つの方法」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2021年2月1日	「1対1や初対面も気軽 オンライン飲み会に多様な可能性」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2021年2月15日	「オンライン飲み会を盛り上げる『ノリ』の正体とは」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2021年2月26日	「まね・型・メモ pフィスの笑いは語学のように学べる」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2021年3月17日	「ダジャレを承認欲求に使うな! アップデートし復権を」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2021年4月14日	「笑いの少ない日本の職場、コロナ禍で加速も組織と笑い調査」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2021年5月12日	「職場を変える「雑談」の魔力 4つの心得」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2021年6月7日	「安心して「ボケ」られるか? 良い職場の条件に」と題し寄稿
日経BizGate (依頼あり)	2021年8月2日	「笑いはもろ刃の剣 リテラシー学び職場活性化を」と題し寄稿
産労総合研究所『看護のチカラ 27』 (580), 41-44	2022年6月1日	自分らしい“笑い”を看護の現場で実践する
東洋経済オンライン (依頼あり)	2022年10月12日	雑談も冗談も御法度! 日本の職場の超深刻な欠点
東洋経済オンライン (依頼あり)	2022年10月13日	日本人の笑いが「グローバル」でなく特殊な深い訳

研 究 業 績 等 に 関 する 事 項

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 キャラ論	単著	2007年3月30日	スタジオセロ	2000年代の若い世代の日常生活のコミュニケーションや人間関係において意識せざるを得ないキャラクターの略語である「キャラ」とはいったい何なのだろうか。都内近郊にて、インタビュー調査を行い、彼/彼女たちの生の声を参考にしながら、一筋縄では捉えにくい若い世代の価値観や人間関係の特徴、あるいは「キャラ」を身につけなければならない理由や、その社会背景についての考察を行った。(B6版 全240頁)

2	笑いの教科書	単著	2008年1月1日	春日出版	自身の吉本興業での経験を生かし、人間関係を円滑にやっていかなければならない日常生活で若い世代がどのように笑いを取るかを考えてもらうための書籍。日常生活で笑いを作るために、生まれ持つの才能やセンスが重要だと語られる笑いの能力にも努力が重要なことを述べた。具体的な方法論として、人の話をじっくりと聞くことや、キャラ化の重要性、相手と何を共有しているのかをいつでも察する努力を行うことなどが必要だと述べた。(B6版 全192頁)
3	若い世代はなぜキャラ化するのか	単著	2009年4月25日	春日出版	下記『キャラ論』の文庫化 古くなったデータなどの変更 (文庫 全297頁)
4	カルチュラル・スタディーズを学ぶ人のために	共著	2009年5月1日	世界思想社	日本のテレビ文化に着目し、視聴形態の変容や、テレビ番組が視聴者にどのような役割を持っているのかを分析した。また、これまで、どのような研究者がテレビをどのように考えてきたのかを簡単に紹介しつつ、文献の整理を行った。(全291頁) 共著書：渡辺潤、佐藤生実 執筆担当分は、コラム「テレビ文化」(242～243頁)
5	笑いの世紀	共著	2009年8月8日	創元社	笑いが頻繁に生じる若者の会話の背後には仲間の内部にしか理解できないキャラがあり、予定調和的な言動、あるいは、そこからのズレを笑う様子を論じた。下記、同名論文のリライトのため詳細は捨象する。 (全391頁) 共著書：井上宏、木村洋二、森下伸也他 執筆担当分は、第4章「コミュニケーションと笑い」のなかの「キャラ化して笑いを操る若い世代」(338～349頁)
6	コミュニケーション・スタディーズ	共著	2010年4月17日	世界思想社	コミュニケーション論のテキストを東京経済大学大学院の渡辺ゼミのメンバーで制作。コミュニケーションとは何かを問い、大学生に「なぜ」という疑問を抱いてもらえるように、図やイラストも含め、執筆した章以外も執筆者のメンバーで何度も議論を交わし制作したコミュニケーション論の入門書。(全251頁) 共著者：渡辺潤、加藤裕康、宮入恭平、佐藤生実他 Part2「感情とコミュニケーション」のなかの「笑い泣き」(102～108頁)
7	文化系学生のレポート・卒業術	共著	2013年4月7日	青弓社	文系の大学生は身近な問題をレポートや卒論で取り上げることが多い。そうした大学生たちに資料の集め方、書くための視点や文章術までを扱った書籍。担当部分は、「若者」である。レポートや論文に大学生という視点をどう取り入れるか、そもそも若者とは何か、現在の特徴などを扱った。 (全246頁) 共著者：渡辺潤、宮入恭平編著 他 執筆担当分：「若者」(69～75頁)
8	限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究	共著	2018年2月16日	ひつじ書房	日本学術振興会の科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)による研究プロジェクトである一般の人や日本語学習者の語る「わたしのちょっと面白い話コンテスト」を通し、現代の日本人の笑いや笑いの作り方について考察を行った。特に、笑わせる意識がどのようにして芽生えてきたのか、また、エピソードと笑わせるがどのように関係してきたのかについての考察を行った。(全480頁) 共著者：定延利之、鎌田修 山口治彦 他 執筆担当：「ちょっと面白い話」を通して「現代社会の笑いコミュニケーション」を考える(84～113頁)

9 ユーモア力の時代	単著	2018年4月1日	日本地域社会研究所	現代社会のなかで笑いやユーモアはどのように価値づけられているのか。笑いに関するデータの分析と考察を行った。また、笑いやユーモアは生活のなかで大切だと様々なメディアで指摘されている割に、私たちはその実践方法を知らない。本書では、日常生活のなかで、私たちがもっと笑うために、その基本的な姿勢、メディアとの触れ方、新しい技術をどうとらえていくか、文化を掘り下げるためになどの項目から論じた。(全280頁)
10 「キャラ」概念の広がり と深まりに向けて	共著	2018年6月26日	三省堂	キャラは、単著にてまとめた通り、若者たちに定着している。その後、10年が経過した。変化したのは、ますます演じることが当たり前になった点、また、SNSによって、複数のキャラをアカウントごとに使い分けること、キャラの便利さとして、親しい関係には楽しさを求めていることを論じた。(全241頁) 共著者：定延利之、金水敏 他 執筆担当：「若者たちのキャラ化のその後」(154～179頁)
11 社会を生き抜く伝える力 AtoZ 心・言葉・声 11のレッスン	共著	2020年3月30日	実教出版	自身のお笑い芸人の経験をふまえ、話すスキルを伸ばすために芸人たちが気にしていることを論じた。また、芸人とこれから話すスキルを伸ばしたい学生との共通点をふまえ、芸人が行っている話す力を伸ばすための修行や考え方をどのように活用するのかについて考えた。(109頁) 共著者：荒木晶子監修 執筆担当：「お笑い芸人の『しゃべり論』」(5～15頁)
12 遠隔でつくる人文社会学知-2020年度前期の 授業実践報告	共著	2020年10月31日	雷音学術出版	2020年度に行った遠隔授業での実践報告。ZOOMでのアンケート機能、チャット機能、LMSのアンケート機能やGoogleフォームでの意見収集とその公開についてのメリットを論じた。また、オンラインでの一体感の作り方についての難しさについて述べた。西武文理大学レジャー産業論(授業実践報告)(133頁)共著者：大嶋えり子、小泉勇人、茂木謙之介
13 新版 コミュニケーション・スタディーズ	共著	2021年1月10日	世界思想社	2010年のものをリライトした。2010年版と比べて、ユーモア研究の進歩について文献紹介を増やし、日本のお笑いの現状についてはテレビの役割やお笑い芸人のメディアでの露出の多さ、それらと視聴者との関係について大幅に書き換えた。(全260頁) 共著者：渡辺潤、加藤裕康、宮入恭平、佐藤生実他 Part2「感情とコミュニケーション」のなかの「笑いと泣き」(102～108頁)
(学術論文) 1 フィールドワークを通して みた東京の若い世代の笑い	単著	2005年7月	日本笑い学会『笑い学 研究No. 12』 (査読付き)	若い世代は友人や恋人とのコミュニケーションで頻繁に笑う。いったいどのような内容で彼/彼女たちは笑っているのだろうか。フィールドワークで得た会話事例を参考に、若い世代の「笑い」を5つのスタイルに分類しながら、その特徴を検討し、頻繁に「笑う」背後に潜む、若い世代の闇の部分に着目した。そこには、複雑な社会を生きる彼/彼女たちの辛さも見え隠れしていた。(20～27頁)

2 「キャラ」という名の個性—若い世代に見られる人間関係とコミュニケーションのスタイル」 (修士論文)	単著	2006年3月	東京経済大学大学院 コミュニケーション 学研究科	街頭にて、インタビュー調査を行い、キャラクターの略語である「キャラ」についての考察を行った。「キャラ」は若い世代の個性の1つでもあれば、アイデンティティでもある。しかし、その一方では、単純に楽しさの追求や遊びに必要な側面もあり、複雑で捉えにくいものである。複雑な「キャラ」の特徴を整理しながら、近年の若い世代の人間関係の実態を明らかにし、なぜ、若い世代は「キャラ」を必要とするのかを検証した。(全75頁)
3 「キャラ化」して「笑い」を自在に操る若い世代	単著	2006年7月	日本笑い学会『笑い 学研究No. 13』 (査読付き)	若い世代の「笑い」の背後には、仲間同士でのみ通じ合える「キャラ」という名のコンテキストがある。テレビのバラエティ番組において、芸人たちが「キャラ化」して「笑い」を取っているのと同様に、日常生活でも若い世代が「キャラ」を武器とすることで、「笑い」を簡単に作るができることを指摘した。(62~70頁)
4 キャラ化する人間関係—若い世代のコミュニケーションの変容	単著	2007年2月	東京経済大学大学院 研究会 『東経大論叢』 第28号	「キャラ」は他者が貼るレッテルの1つであるが、戦後以降、若い世代にはどのようなレッテルが貼られてきたのだろうか。歴史を振り返りながら、若い世代に貼られたレッテルを細かく整理し、いつ「キャラ」を若い世代が必要とし、それが浸透していったのかを探るために、先行研究や資料を頼りに考察を行った。(99~120頁)
5 「日常生活」と「出会い」にみる若い世代の笑い—会話調査の事例からの考察	単著	2007年7月	日本笑い学会『笑い 学研究No. 14』 (査読付き)	若い世代がどのような状況でよく笑っているのかを考察するために、フィールドワークから得た会話と参与観察を行った。その結果をもとに、状況によって笑う量が変わることを論じた。ひたすら仲間といるときは「空気を読む」ことに徹し、どこで笑わなければならないのかという判断をしなければならない若い世代の複雑な社会について検討した。(59~68頁)
6 大学講義での講師と学生の相互行為—非常勤講師デビュー体験論	単著	2008年2月	東京経済大学大学院 研究会『東経大論 叢』第29号	非常勤講師の経験を生かし、教室内での学生と講師との相互行為に着目し、「いかに講師らしくふるまうか」というドラマスティズムの視点で考察を行った。また、講師のしゃべり方、学生への関心の引き方などに関して、現在、活発には議論が行われているとは言えない大学講師デビュー、大勢の人のまえでしゃべることに関する講義方法や注意点などに関し問題提起をした。(31~56頁)
7 ストリート・パフォーマンスの集まりの構造—原宿、代々木公園周辺を事例として	共著	2008年2月	東京経済大学大学院 研究会 『東経大論叢』第29 号	原宿、代々木駅周辺にて行われている音楽の演奏、ダンス、お笑い、大道芸などのストリート・パフォーマンスでは、どのようにオーディエンスを立ち止まらせることを促し、また反対に立ち止まらせるのを拒ませるのだろうか。フィールドワークの結果、立ち止ませ方を「偶然的」、「劇場型」、「共同体型」の3つに分類し、人々の相互行為の論考を行った。 共著書：宮入恭平、佐藤生実、武田和彦 執筆担当分は、第2章 原宿のストリート・パフォーマンスの実態 (175~197頁) (担当：179~186頁)
8 松本人志イズムの蔓延—松本人志が若い世代に与えた影響に関する一考察	単著	2008年7月	日本笑い学会『笑い 学研究No. 15』 (査読付き)	本稿では、90年代から現在を代表するお笑い芸人であるダウタウンの松本人志に着目し、彼の笑いのスタイルや社会的な評価を考察しつつ、彼が、若い世代の「日常生活のコミュニケーションや笑い」に与えた影響を考察した。とはいえ、マス・メディアが視聴者に与える影響の考察は単純なものではない。そこで、本稿では松本が若い世代に与えた「影響の可能性」に限定しその検証を行った。(75~86頁)

9 若い世代の闇の笑い—人は笑うのか、笑わなければならないのか	単著	2014年7月	日本笑い学会『笑い学研究No. 21』 (査読付き)	街や勤務先の大学でフィールドワークをしていると、笑い合うことで仲間同士、安心し合ったり、実際は「つまらない」と感じているのにも関わらず空気を読んで笑って楽しいふりをしてみたり、まじめな話を避けるためにふざけてばかりいる若者に出会う。若い世代のこうした笑いに着目し、その実態を抽出しつつ、そこから読み取れる意味を考察した。そこには何よりも楽しい空気を重視するあまり、笑うことでしか繋がりが見いだせない若い世代の特徴が見て取れた。(45～59頁)
10 Observations on Intra-Nebular Kyara Among Youth	単著	2015年11月	Acta Linguistica Asiatica Vol 5 No 2 (2015)	日本の若い世代がコミュニケーションのなかで用いるキャラの現状を論じた。人種の問題などがない日本で、キャラは他者との差異として用いられ、自分らしさの1つとして機能している。若者たちは、それらを用い、コミュニケーションを楽しんだり、盛り上げたりもするが、傷ついたり、嫌な思いをしていることもある。また、キャラを戦略的に用いたり、ネット上で複数の別のキャラを演じ分けたりしているキャラ文化は、日本に独特なのではないか指摘を行った。(43-50頁)
11 現代若者ことば論 — 「新しい若者」の価値観を読む	単著	2019年10月	日本青年館「社会教育」編集部『社会教育 = Social education 74(10)』 (依頼あり)	日常生活のなかで若者たちが親しい友人たちに対して頻繁に使用していることば、「やばい」「それな」「あいまいことば」「ワンチャン」などを取り上げ、その背後にある若者たちの価値観や社会について考察した。仲間に対しての微妙な気遣いや共感が重要なこと、内容や伝達や分かりあいよりも、相手の発言に対して反射神経で対応している側面が出てきていることを指摘した。(14～19頁)
12 コロナ禍で浮き彫りになった若者たちのコミュニケーション能力の格差	単著	2020年10月	日本青年館「社会教育」編集部『社会教育』75(10) (依頼あり)	コロナ禍で若者たちのコミュニケーションはどのように変化したのか、遠隔授業、SNSなどに対して抵抗感を持たずコロナ以前とそれほど変化しない生活を送れる者がいる一方で、友だちができない、授業についていけない、誰にも相談できない若者をふまめ、コミュニケーションの格差がコロナによって浮き彫りになっているという問題点について指摘した。(22-27頁)
13 若者たちの笑いの変化について考える	単著	2021年10月	日本青年館「社会教育」編集部『社会教育』76(10) (依頼あり)	本稿では、テレビのお笑い、インターネット上の動画メディアでの笑い、そして日常生活のなかの笑いに着目し、現代社会の若者たちにとっての笑うという意味での「面白さ」とは何なのかについての考察を行った。感情と共感が重視されるなかで、若者たちにとってはあらゆる感情が「ヤバい」という単語に集約され、それを状況に応じて自在に自分の都合のよい形で読み込み、解釈するようになってきていることを指摘した。(34-40頁)
14 SNS時代における若者への情報の伝え方とコミュニケーションの取り方	単著	2022年10月	日本青年館「社会教育」77(10) (依頼あり)	Z世代と言われる若年層の人間関係やコミュニケーション、特徴などをふまえ、どのように、大人世代が接していくべきなのか、その際に、注意しなければならない点などについて言及した。参考にしたのは、筆者が大学生を対象に行ったアンケート調査である。そこで拾えた声からは、若者たちのわがままさや勝手さも見えたものの、コミュニケーションのあり方や求めるものの、例えば、態度や言い回し、尊重などに変化があると指摘した。一方で話しやすい大人についてもまとめ、相手を分からないというところを出発点にしてコミュニケーションすべきだと論じた。(35-41頁)

(研究ノート)

1 若者ことばをフィールドワークする	単著	2005年3月	東京経済大学コミュニケーション学会『コミュニケーション科学No. 22』(査読付き)	2015年1月に、「笑いに関する意識調査」を関西と関東で行い、その結果をもとに、彼/彼女たちの笑いの実態を記述し、そこに見え隠れする問題についての考察を行った。今回調査した大学生は日常生活の笑いの実践に対して積極的であることが分かったが、その一方で、愛想笑いをする人や仲間内で発生した笑いで傷ついたり、悲しい思いをしたりする人もいた。また、なかには、怒りたくても怒れずに無理して笑う人もいたことなどをふまえると笑いにも問題があることが見えてきた。(295～323頁)
2 笑いの変化に関する一考察—メディアと若者の関係から紐解く	単著	2009年12月	『日本笑い学会関東支部15年のあゆみ』	笑いとはときと伴に変化してきた。本稿では近年のメディアの変化、特にネットやスマートフォンなどの普及によって、若者たちの日常生活の笑いがどのように変化したのかを論じた。若い世代にとってメールの代わりとなったLINEというツールは日常生活のコミュニケーションよりもウケを狙いやすいということを指摘した。(105～108頁)
3 メディアの「お笑い」と若い世代の「笑い」	単著	2014年12月	日本笑い学会・関東支部	現代のテレビのお笑いの特徴を整理し、そこでのコミュニケーションや笑いの作り方が日常生活の若い世代の何気ないコミュニケーションと似ている点と似ていない点を指摘した。笑われることへの意識、ツッコミ、リアクションなど似ていることを指摘しながら、そこに偏りがあることを論じた。そして、笑いの作り方は他にもあるのではないかという必要性を主張した。(45～47頁)
4 大学生の笑いをスケッチする—東西のアンケート調査から—	単著	2015年8月	東京経済大学コミュニケーション学会『コミュニケーション科学No. 22』(査読付き)	若い世代の日常会話をフィールドワークし、そこで得られた会話から読み取ることのできる若い世代のコミュニケーションの特徴や傾向についてまとめた。たとえば「話すこと」ばかりが主体となり「聞くこと」に重きをおくことのできないという若者の傾向や、略語、新しいスタイルの敬語、面白さばかりを追求する会話のスタイルなどに着目し、なぜ、そのような社会になったのか、その要因を考察した。(295～323頁)
(その他)				
(研究発表)				
1 笑いと言語	単独発表	2005年10月22日	地域メディア研究会第17回研究会 東京経済大学	テレビはどのような笑いを発信しているのだろうか。その特徴やそれを試聴する人がどのように思うのか、若い世代、高齢者などの見方や感想の違いなどをフィールドワークした結果から、整理し発表した。結果、キャラをたやすく理解する若い世代、そして、それに愛着を持っていく傾向があるものの、高齢者はそのキャラを瞬時には読み取りにくいという指摘をした。
2 「笑い」を重視する若年層のコミュニケーション—会話分析からみる一考察	単独発表	2007年6月17日	第55回関東社会学会大会 筑波大学	社会学の領域では、日常生活の中で他者の「笑いを取る」というスタイルの会話にはあまり注目が集まっていないため「若年層は日常会話で笑いを重視する傾向にある」という仮説を出発点にして、彼/彼女たちが実際にどのような内容で笑っているのかを提示した。また、そこから見えてくる傾向を指摘し、若年層が日常会話で頻繁に笑うという行為の背後にある若年層の特徴や問題点を検討することで笑いの現代的な意味合いを考察した。

3 若い世代の笑い	単独発表	2007年8月18日	第130回日本笑い学会 関東支部 研究会 台東区民館	統計調査、及び、自身のフィールドワークで得られた結果をもとに若年層と高齢者の笑いや、笑いの実践への関心の違いを指摘し、若い世代が、笑いを大切に理由を論じた。特に、若い世代の人間関係の複雑さや、生きにくさを指摘し、笑い合っている背後には、重視される過剰なやさしさがあり、相手を傷つけない、自分が傷つけないためにも、まじめな議論や本音を語り合うよりも、笑いを介したコミュニケーションをして友人関係を円滑にしていることを述べた。
4 笑わざるを得ない若い世代のコミュニケーション	単独発表	2008年7月13日	第15回日本笑い学会 大会 京都外国語大学	若い世代に「笑い」に関するインタビュー調査やアンケート調査を行ってみたところ、彼／彼女たちの「笑い」への意見は多様で複雑なもので、表面的には、楽しむため、あるいは、場を盛り上げるためでもあるように見えたが、その背後には、人間関係の複雑さや、生きにくさ、自分や他者への不安さなどの闇の部分も見えてきた。そんな複雑で多様な声を頼りに、彼／彼女たちのコミュニケーションや人間関係の実態を検討しつつ、若い世代の「笑いの実践」の意味や、その傾向、そして、彼／彼女たちが「笑い」を重視する／せざるを得ない理由、あるいは、社会的な要因などを検討した。
5 教科書のクロスオーバー	単独発表	2008年7月19日	第141回日本笑い学会 関東支部 研究会 台東区民館 (依頼あり)	元芸人の経験を生かし、日常生活のなかでどのように人と円滑にコミュニケーションをしていくべきかを検討した。特に、笑いやユーモアを日常生活のなかに取り入れることの意味や、話術としての笑いの効果や、その作り方についての検討を行った。結論として、日本の笑い文化は身内には開かれているものの、ソトの人、初対面の人に対しては開かれていないため、アメリカのように、誰にでも冗談を言える環境ではないことを述べた。
6 笑いの世紀—若者の笑い、シニアの笑い	単独発表 及びシン ポジウム	2009年11月21日	日本笑い学会 関東支 部 15周年記念研究会 明治大学	発表者が2008年に行ったインタビュー調査、及び、アンケート調査の結果から読みとれる若い世代の笑いの特徴やその社会背景について論じた。本発表では、若い世代の笑いの発生理由が「面白い」から笑うという単純な話ではなく、仲間同士の力学のなかから生まれていたり、友だちと一緒にある場を共有しているときには、楽しい振舞いをせざるを得ないために笑っている側面があることを指摘した。
7 笑いの感情社会学—私たちは笑うのか、笑わなければならないのか	単独発表	2010年7月11日	第17回 日本笑い学会 大会 関西大学	2010年度に実施した調査をもとに、若い世代がどのように愛想笑いを自覚し、どのように、日常生活で笑っているのかを論じた。また、A.R. ホックシールドが提唱した感情規則に着目し、若い世代の人間関係のなかでの楽しくなければならない規則に関し集まった意見を論じつつ自発的に笑うのではなく、笑わざるを得ない場面が多い閉塞感漂う若い世代の人間関係について論じた。

8 東日本大震災で「お笑い」はどのような被害を受けたのか—吉本興業を事例とした—考察	単独発表	2012年6月9日	第60回 関東社会学会大会 帝京大学	本発表では、ポピュラー文化のなかの「お笑い」——そのなかでも代表的な芸能プロダクションの吉本興業に着目し、3.11以前、そして、3.11発生直後、3.11以降の3つの期間で区切り、以下の事柄について整理、及び、考察を行うことを目的とした。まず、3.11以前に関しては、2000年代のお笑いの特徴や動向、及び、吉本興業のメディア戦略の整理を行い、そのようななかで突如として東日本を襲った大震災によって、吉本興業、及び、そこに所属する芸人たちはどのように状況が変化し、被害を受けたのか、また、お笑いやテレビのパラエティ番組は、自粛、不謹慎だといった社会の風潮のなかで、吉本興業はどのようなチャリティイベントや復興支援を行なったのかをまとめると同時に、それらが雑誌や新聞ではどのように報じられたのかを論じた。
9 Webの笑い—2ちゃんねるやニコニコ動画のなかに見られる笑いの一考察	単独発表	2013年8月31日	第20回日本笑い学会大会 札幌市教育文化会館	本発表は、Web上に見られる多岐にわたる笑いを整理しつつ、その実態や特徴をとらえることが第一の目的である。Web上には日常生活の中では見られにくい笑いはあるのだろうか。また、何か新しいスタイルの笑いは生まれてはいないのだろうか。本発表で着目するのは匿名のコミュニケーションである。むろん、匿名のサイトもWeb上には多くあるものの、日々、活発で、かつ継続的にコミュニケーションが行われているということに限定してみると、注目すべきなのは、日本で最大の掲示板である「2ちゃんねる」だと考えた。また、そこでのコミュニケーションに近いと指摘されることの多い動画サイトの「ニコニコ動画」(ニコニコ生放送)に限定して今回は考察を行った。
10 ネット上の笑い—テレビのお笑いとお笑いのネットの笑い	単独発表	2013年11月16日	第205回日本笑い学会 関東支部 研究会 台東区民館	ソーシャルネットワーク上での笑いや2ちゃんねる、ニコニコ動画などでの笑いの整理をし、その後、テレビのお笑い(バラエティ)とは何が異なるのか。事例などをあげつつ笑いの比較考察を行った。結果として他者を見下し、嘲笑うスタイルがネット上では多いことを指摘した。
11 笑いのコミュニケーション能力を考える	単独発表	2014年8月3日	第21回日本笑い学会 大会 関西大学 堺 キャンパス	日常生活のなかの会話などで「笑わせる技術」のことを本発表では「笑いのコミュニケーション能力」とし、そうした能力について、発表者の経験(芸人、大学地域開放の講義、日常会話)を通して、どのように利用でき、どのような方法でそれを伸ばすことができるのかを論じ、その際の問題点を指摘し、今後、幅広い世代の笑いの教育の可能性を述べた。
12 コミュニケーション学の視点から大学生の対人関係を考える	単独発表 及びワークショップ	2014年9月18日	日本国際秘書学会 東日本支部 東京ウィメンズ・プラザ	本発表では、大学生の人間関係、及び、コミュニケーションの特徴の整理を行った。グループ化、自信のなさ、共感、孤独だと見られることを嫌うなどの視点から社会学の若者論で論じられていることを整理した。また、こうした実態をふまえて、大学生のコミュニケーション教育のための実習の提案を行った。
13 コミュニケーションからみたキャラ	単独発表	2015年11月15日	第16回 日本語文法学会 大会 学習院女子大学	拙著『キャラ論』(2007)で論じたことの整理、および、若い世代のキャラの実態のその後について論じた。若い世代にとっては、2007年よりも、現代の方が演じることがますます当たり前になったことと、スマートフォンの普及によりネットのなかでのキャラが変化したことを述べた。特に、FacebookやTwitterでのアカウントとキャラの関係の実態をいくつかの調査を参考に解説し、そこに潜む問題点を指摘した。

14 笑いで繋がる若い世代の光と闇	単独発表	2016年8月4日	追手門学院大学笑学研究所 研究会	よく笑うとされている若者たちは、よく笑っていて、毎日が楽しいと考えている者が多い。ところが、自身がフィールドワークをした結果や、いくつかの調査を参考にすると、彼・彼女たちは、愛想笑いも非常に多いことが分かる。若者たちは、仲間と繋がったり、嫌われたりしないために笑っている一面もある。面白いから笑う、楽しいからわらただけではなく、笑いは、気遣いや、やさしさとして活用されていることを指摘した。
15 なぜ若者たちはよく笑うのか —若者たちの笑いから他の世代は何を学ぶか	単独発表	2016年8月20日	第238回 日本笑い学会 関東支部 研究会 台東区民館	若者たちは上の世代よりも笑っていることを各種統計データから読み取り指摘した。また、なぜ、他の世代よりも多く笑っているのかを検討し、他の世代ももっと笑うために、若者たちが、テレビを通し、自覚的／無自覚的にお笑い芸人から学んでいる「笑いの文法」の変遷を考察した。
16 若者たちのキャラ闘争及びワークショップ	単独発表	2016年10月30日	日本語学会2016年度 秋期大会 山形大学	本発表の目的は、若者たちのグループに見られるいじりキャラといじられキャラの間に見られるコミュニケーションの特徴の考察を行うことである。両者には、スクールカースト上位であるいじりキャラから下位のいじられキャラに対して、「お前」という「呼びかけ」が多く使われているものの、下位から上位に対しては、それらの呼びかけが用いられない傾向があった。アルチュセールの議論を参考に、そこに、権力関係が読み取れると指摘した。同様に、上位は下位に対して、威圧的で命令的な語尾を用い、下位は上位にあいまいなことばが多く使われるなどの特徴を指摘し、ことば遣いによって、キャラの地位の差異が構築・維持されていることを述べた。
17 笑いとユーモアの問題点は何か？	単独発表	2017年7月16日	第24回日本笑い学会 大会 石巻専修大学	定延利之、金水敏、Andrej Bekeš、他 笑いやユーモアの問題点は、若い世代に限定されたものだと考えていたが、他の世代の家庭、会社、教育などのコミュニケーションの場にも似た問題が見え隠れしているのではないだろうか。世界的に見ても、日本社会のなかでも、笑いやユーモアは、ポジティブなものとして語られ、扱われている傾向があるが、本発表では、若い世代の笑いやユーモアの問題点を出発点にして、日本社会のなかの笑いやユーモアの負の側面についての整理・考察を行った。
18 変化する日本人の「面白い話」—「笑いの文法」を手に入れ始めた日本人	単独発表 及びシンポジウム	2017年8月29日	2017年EAJSリスボン 大会 プレイベント ヨーロッパ日本語教師会、ヨーロッパ日本研究学会 リスボン新大学	コミュニケーションが重視される社会のなかで、若い世代は、芸人たちのネタやトークから様々な影響を受けたり、学習をしたりして、自分の日常生活のなかの何気ない話を面白い話に変えるための文法を手に入れてきた。若い世代がどのようにテレビを見て、何を学び、どんな影響を受けてきたのか、また、具体的にどのような笑いの文法を学び、日常生活で活用しているのかを考察した。
19 大学における実践コミュニケーション教育の意義—口語表現法履修者へのアンケート調査から	共同発表	2019年6月1日	大学教育学会 第41回 大会 玉川大学	コミュニケーション能力の向上のためのプログラムとして1年生に必修科目として開設をしている0大学の口語表現の授業の成果及び、その意義に関する学生の意識調査（全2回、1回目は履修者538名、2回目は履修者418名）をもとにKHCoderにてテキスト分析、及び、量的調査、KJ法などを用い分析、考察を行った。授業直後には96%の学生が役立つと考えていた。また、自分や他者のスピーチの伸びを様々な言語で具体的に評価することができるようになったものの、次年時に用意された選択科目は履修したくないなどの問題、数年後に得た能力が持続できているのかという問題が明らかになってきた。 共同発表者：荒木晶子、片山奈緒美

20 大学生の日常生活の笑いに関する考察	単独	2019年8月20日	追手門学院大学 笑学研究所 研究会 (依頼あり)	若者たちの日常生活のなかで行う愛想笑いの意識、及び、若者たちの考える「面白い人とはどのような特性の人なのか」に関する調査から分かったことについて論じた。前者に関しては、2018年の日本笑い学会の全国大会で行ったポスター発表のその後について発表を行った。後者については、後の日本笑い学会の発表の際の事前発表と意見交換と位置付け、積極的に笑いの研究者から意見をもらった。
21 コロナウィルスで日常生活のなかの笑いはどのように変化したのか	単独発表	2020年3月6日	日本笑い学会 2020年度特別研究発表会 (オンライン)	2020年、新型コロナウイルス感染症によって、発表者たちの生活のスタイルは大きく変わらざるを得なかった。様々な文化、商品、サービスなどの変化が研究対象として扱われているが「笑い」はどうだろう。コロナ以前、日本社会では、笑いはコミュニケーションのなかで重視されていた。では、コロナウィルスが蔓延したことでどのように変化したのだろうか。本発表では、コロナ禍以前とコロナ流行後の笑いの変容について、コロナウィルスそのものの特徴、コミュニケーションの変化、各種調査、発表者が行った調査などを参考に論じる。また、新しい生活様式のなかで、発表者たちはどのように笑うべきなのか、また、どのように笑いを活用していくべきなのだろうか。これらの問題について、笑いやユーモアの効果や機能をふまえていくつかの提案及び、考察を行った。
22 日本のお笑い文化のゆくえ	シンポジウム 司会、 コーディネータ	2022年8月28日	日本笑い学会 研究大会 台東区民会館 対面、及び、オンライン	日本社会の「お笑い文化」の変化に着目したシンポジウム。メディアの研究者、及び、実践的な立場から芸人を招き行った「お笑いのいま」と「変化」から見る「ゆくえ」についてを問うシンポジウム。落語に新たな観客を取り入れようとする試みや、お笑いと言語との関係、観客や視聴者の変化、若手芸人の目指すべきポジションの変化についてディスカッションを行った。芸人：サンキュータツオ、矢島ノブ雄（オシエルズ）、太田省一（社会学者）、影山貴彦（メディア研究者）
<p>(ポスター発表)</p> <p>1 愛想笑いに関する研究</p> <p>2 「面白い人」の条件とは何かー若者たちのユーモアセンスについて考える</p>	<p>単独発表</p> <p>単独発表</p>	<p>2018年7月14日・7月15日</p> <p>2019年8月24日</p>	<p>第25回 日本笑い学会大会 関西大学 堺キャンパス</p> <p>第26回大会 日本笑い学会大会 岡山理科大学</p>	<p>本発表では、大学生を対象に、フィールドワークを行い、彼/彼女たちが、愛想笑いをどのように考えているのかの詳細を探ってみることを目的とする。具体的な質問項目は、日常生活のなかで愛想笑いと言語との関係、自然な笑いのどちらのほうが多いのか、自分と関わりのある人はどの程度愛想笑いをしていいるかと思うか、それが相手に見破られているかなどである。これら質問についてそれぞれの結果の考察を行い、自然な笑いと愛想笑いとの違い、現代社会のなかの愛想笑いの意味やコミュニケーションのなかでの役割、若い世代が愛想笑いをどのように考えているのかなどについて考察した。</p> <p>若者たちは面白い人のことを指し、「ギャグセン（ギャグ線）」が高い/低い、ある/ないと言う。このような実態をふまえて、若い世代にとって、どのような人が、ギャグセンが高いのか、また、その対称として、どのような人が、ギャグセンが低いのか、自分自身のギャグセンへの自信の有無などについて質問紙によるアンケート調査（選択方式、及び、自由記述）を行い、彼/彼女たちにとっての「面白い人」の構成概念について考察した。</p>